

早稲田大学
創造理工学部・研究科
広報誌

Creative People

創造人

<http://www.cse.sci.waseda.ac.jp/>

January 2012

01



Interview

イマジネーションの力で 「風景」に立ち向かう

社会環境工学科

佐々木 葉 教授

フィールド：景観デザイン、まちづくり、都市史

〒165-8555
東京都新宿区大久保 3-4-1
Tel 03-5286-3000
Fax 03-5286-3500

イマジネーションの力で「風景」に立ち向かう

社会環境工学科は、旧土木工学科の伝統を踏まえながら、社会基盤、環境防災から計画マネジメント部門まで、そのフィールドは社会環境全般にわたっている。佐々木葉教授の専門は「景観デザイン」、キーワードは「風景」。創造力にはImagination(想像力)が欠かせないと、創造理工を牽引する。

実にオーガニックな街「東京」

東京という街は写真で見ると人工的な建造物ばかりで、人間が勝手に作ったように思いますが、実際は地形などに合わせて実にオーガニックに出来ています。人の動きや車の動き、ネットワークのつながりが弱いところ、強いところが数値化できるグラフ理論をもとに分析すると、人工的に見えていた東京の認識が変わります。コンクリートでできた人工的な水路に見える神田川も、尾根や谷が微妙な水の流れを作りだす生き物のように見えてきます。そうすると、これから作ろうとする街の在り方や暮らしの在り方も変わってきますよね？

Q 街づくりの提案の仕方も変わってくるということですね？

東京は人工的な大都会ですよ、だから、ここはこんな新しい形にデザインしましょうというのか、それとも東京は、生き物みたいに有機的でやわらかい街なんですよ、どうしていきますか？というのでは街づくりが全然違ってきます。今までの公共事業は合理的、効率的で最大公約数的な整備をしてきた。それは東京の本当の姿である有機的な特徴を書き出すツール、大量に複雑なものを大量に複雑なまま書き出すツールがなかったからだと思います。我々は今、個別具体的な大量のデータをそのままの形で処理する、ということが可能になったデジタル時代に生きています。その技術を使えば、風景や、地形の見え方、街路の見え方も変わってきます。そういう中で、風景がどのように立ち上がってくるかを私自身が捕まえたいのです。



2500分の1という詳細な地形図をもとに東京中心部の街路5万3千本をSpace Syntax理論によって分析して、ネットワークのつながりの強弱を可視化した。(作成 高野裕作)

「風景が立ち上がる」

Q 「風景」とは何なのでしょう？

風景というのはだれにとっても身近なものです。改めてそれは何か？とよくよく考えると結構難しい。私の一番の先生である中村良夫先生（東工大名誉教授）は「人を取り巻く環境の眺めだ」とおっしゃっています。見えているものは何でも風景というわけではなく、あるときふっと風景になる。私たちの言葉で「風景が立ち上がる」と言いますが、それはただ一枚の写真を書き写すように決められるものではない。見て、知覚して、認識して、記憶して、イメージになって、価値観や行動によって影響を受けて、とぐるぐる影響しあうなかで風景というのできてくる。今までは一枚の写真で、景観や風景、デザインということを考えていたのですが、決定的に欠けているのが体験の中にある時間軸という要素です。例えば通りを歩いているときに直前に広い通りからやってきたら、少し裏通りに入ってきたな、と思いますし、逆に狭いところから出てきたら、表に近づいてきたな、と感ずります。表通りとか裏通りとか、町の中心とかはずれという、我々が風景だと思っているものは時間軸との強い関係性の中にあるのです。



恵那市での景観まちづくりワークショップのひとつの場面。地域にとってよそ者である学生は、議論を進めるファシリテーターとしてのポテンシャルが高い

Yoh Sasaki

Q 「風景」をまちづくりにどう活かすのですか？

いろんな自治体の景観デザインのお手伝いをしていっていますが、みんな言い出すのは、派手な色を使うな、あまり高いものを建てないようにしよう、電線や看板をなくそう、といったことですが、そうじゃないでしょうか？と。風景というのは生成されていくメカニズムですから、そのメカニズムのほころびを解決するのが「風景をデザインする」ということです。だからそこに立ち返って議論をしませんか？と言うんですけど、その話ってとてもわかりづらいですね？

そんな中で、「よくわかんないけど、面白そうだからやってみようか」と言ってくれたのが、岐阜県の恵那市でした。それからパートナーとして4年くらいになりますね。

岐阜県恵那市。名古屋から一時間くらいの地方都市。人口約54,000人。2004年に恵那市と恵那郡南部の町が合併して現在の恵那市ができた。豊かな田園や歴史的まちなみもあるが、人口の減少傾向とコミュニティの衰退に悩む典型的な地方都市だ。

実際に住んでいる人たちがどう感じているかが一番重要なので、ワークショップというかたちでワイワイガヤガヤ意見を聞いてきました。みなさん地域のことはよく知っているんですが、それを共有化できるかたちで表現できない。自分の家を建て替えたいとか、自治体ならこう直したいとか個別にいろいろ実行するわけですが、ばらばらな価値観に立ってやると結果的にそれが景観を壊すということがあります。だから、ここにどんな価値があるのかというのを認識し共有化しなければいけない。そのためのワークショップを続けてきました。

ぐるぐる影響しあうなかで風景というのはできてくる。



恵那市岩村地域の絵図。ワークショップの結論をもとに、デジタル地形データを立ちあげたものを加工して作成。京都大学、岐阜大学、日本大学との共同研究



岩村・富田絵図

地図や写真ではなく「絵図」を作って

形にしないとわかりづらいので、写真で撮ったり、地図にしたりしてみました。地図と写真で町を表現するのが難しいので、絵図を作ることに挑戦しています。コンピュータの地図データを使いながら、絵のうまい人にも手伝ってもらって作っています。

Q 町の本来の雰囲気が伝わってきますね。

絵図をみながら、この辺が古い町並みのところで、ここに美しい田んぼがあって、そこを山が囲んでいて、こちらにローカル鉄道があって、というのがわかる。そうすると、自分たちの街というのは元々城下町で、田園地帯とセットになっていて、そこを貫くように鉄道が走っているんだな、と。そのなかで、私の家はこういう町の一部なんだと感じてもらえるのです。

昔の地図は今のよう精度が高くないわけですが、むしろそういう時代に人間がイマジネーションで描いたもので素晴らしいものが沢山あります。そこには主観が入っていて、大事なものが強調されて、そうでないものは小さくなっている。方向というのも重要で、この方向から見た姿が私の町だというのが各地域にあります。かなり作りこんでから、地元の方に「向きが違う」と言われたこともありましたが（笑）

岐阜県恵那市との関係は4年前くらいからだが、もうひとつ同じ岐阜で、郡上市八幡町とのつきあいは17年になる。早稲田に来る前から、橋のデザインから始まって、街並みの調査や空き家の活性化、水路の整備など、定年後には郡上八幡に住むつもり、というほど思いは深い。

Q 大震災後の復興については？

「見たことはないけど、懐かしいもの」というのを作りたいね、という話をしています。家も道も新しく作り直すのだから新しい風景になるんだけど、どこか懐かしい風景。復興の議論をするときにどういう地図を使うのか、それによって計画される街の姿が全然違ってきますよね。未来ばかり見てはだめで、過去からの視点を持ちながら一歩前を想像し、なおかつ一歩後ろのことも見えていないといけない。豊かな想像力がないとそういう視点でモノやまちを見ることができないのではないのでしょうか。

創造には「想像力」が欠かせない

だから、学生たちに一番つけてほしい力はイマジネーションの力。想像する力です。学生にはよく言っているんですけど、創造理工学部のそうぞうCreationはimaginationの力がないとできないよ、と。でもimaginationは無からは生まれないから、日ごろからimaginationの「種」をたくさん集めておくこと。小説を読んでも、映画でも電車の窓からの風景でも、人と人のやりとりをみても、自分のimaginationの種にできるということが大事。それが沢山あれば、ある刺激があった時にシナプスがつながるような新しいイメージができていく、と。

この前卒業生に言われたんですけど、「先生ってなんでも風景に持っていくんですね」って。小説でもなんでも風景の話につなげるというのはすごいって言われたんです。逆に言うと、風景というのはそれだけ多面的なプラットフォームなのかな、と思います。だから一生つきあっていくにはいい相手ですよ。私が、日々楽しそうにしている理由がわかるでしょう（笑）。